

- * 筆者の父は 1945 年 6 月の名古屋熱田空襲で勤務していた工場が爆撃され、重傷を負う。母は父をやっとの思いで病院に血まみれの父を探し出して、九死に一生を得る。父母はその前に父の母と 3 歳と 5 歳の娘を急性腸炎で亡くしていた。戦争の悲惨を忘れてはいけない。
- * 名古屋の空襲の爆撃機に乗っていた一人がディシエイザー。真珠湾攻撃を初め日本に対する憎しみと復讐の念に燃えていた。後に日本軍の捕虜となって過酷な生活を送る。その時に幼いころに教会に通って聖書に再び触れ、聖書が神の言葉であること、イエス・キリストが救い主であることをはっきりと悟る。そして憎しみが愛に変わった。
- * 「敵を愛する」ためには二つのことがどうしても必要であることを学ぶ。一つは悔い改め。彼が独房の冷たい床の上で、自分が犯して来た罪を認め神様に赦しを願い、心は回心した喜びで満たされたこと。そして敵を愛することを身近で実行したこと。憎き看守に「オハヨウゴザイマス」と笑顔で声をかけるとその後、扱いが和らいだという。もう一つは、世界の平和のためにはイエスがどうしても必要であるということ。キリスト抜きでは憎しみや戦争がおこる。彼はかつての敵国日本へ渡り 30 年間イエス・キリストを伝え続けた。真珠湾攻撃隊長であった淵田三津雄氏はディシエイザーの証を読み、彼も「敵を愛する」ことに共感し、キリストの愛と赦しを伝えるためにアメリカに渡って行った。(クリスチャン新聞 8/13 号参考) 二人の平和の使者に注目したい。
- * 「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあられさせてくださいますように。」(ローマ 15 : 13) 前節で「異邦人はこの方(イエス・キリスト)に望みをかける。」とイザヤが預言していることが引用される。ユダヤ人と異邦人の対立があった。現代でも国民体国民、民族対民族の対立が根強くある。しかし、すべての国の人々がイエス・キリストを信じる信仰に導かれ、主にある喜びと平和を得ることができれば永遠の平和が来る。私たちの神は望みの神である。
- * 数年前からの日本の政治の動きは戦前再来と言えるような状況である。日本国憲法が掲げる平和主義、基本的人権、信教の自由を踏みにじられることがないよう祈りたい。国の政治に権力を持った人が高ぶり、自分の考えを押し通そうとすると、そこには不正や不義が行われることが多い。神は必ずそれを裁かれる。私たちひとりひとりが平和を運ぶ器として何等かの働きができるようにしたい。過去の苦しい過ちと経験を繰り返さないことを誓いつつ。